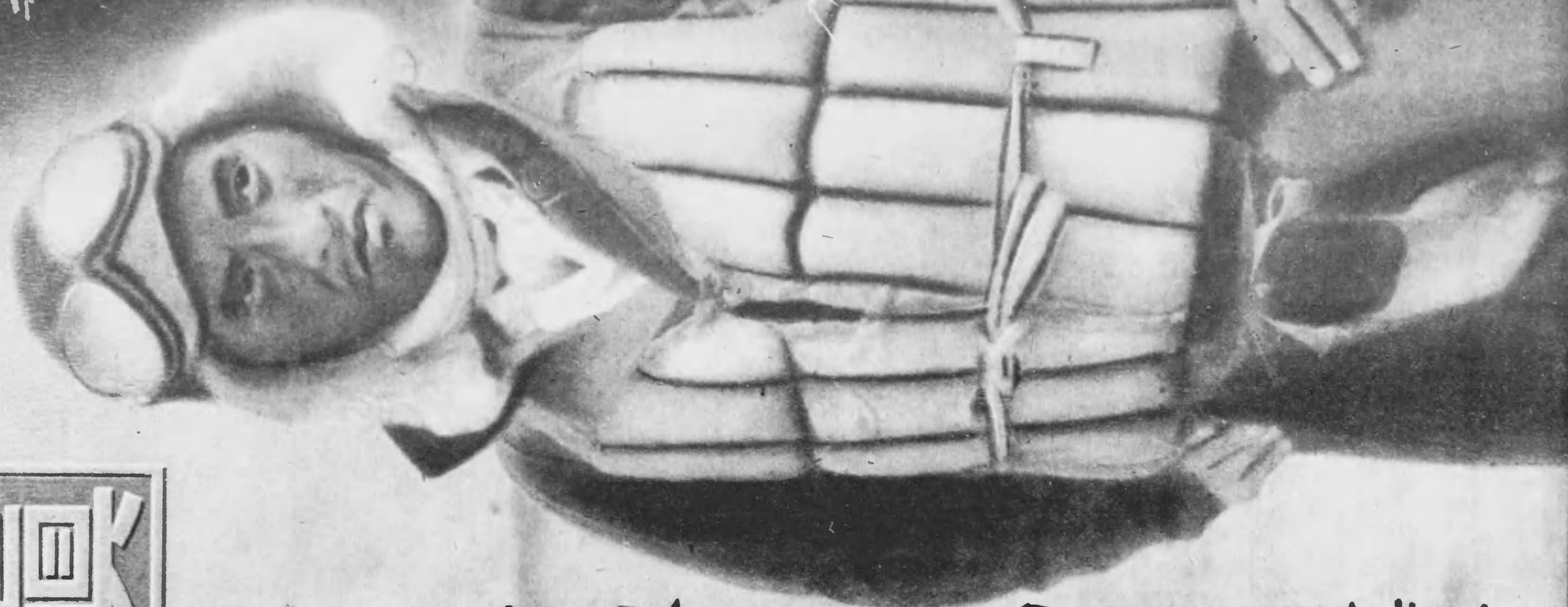


週報寫真



一機命中に 神州を護持す
あ、神風特別攻撃隊
忠烈 萬世に燦たり

必死爆撃行に出撃の日の神風第一隊特別攻撃隊隊長飯島隊長大尉。出撃の直前「俺たちは爆撃隊員ではなく爆撃機だ。い、か、俺に頼むのだ」と大尉は隊員を激励したといふ。十一月二十五日 長島〇〇基地にて撮影 小野田報道班員

断絶の遺列 断絶の遺列

神風特別攻撃機隊



東島の大和心もかぐはしい神風特別攻撃機隊員行男海軍大尉以下の萬世に傳ふる忠烈、その忠烈に我ら一併奮しく胸打たれ、機をのみ、頭を垂れたのは、去る十月二十八日十五時、大本營から豊田聯合艦隊司令長官の空軍に對する布告を發表された御座りであつた。越えて三十一日十六時三十分、大本營は二十五日の東島隊員の遺書をはじめとして、三十日に至るまでの神風特別攻撃機隊員の、歴々たる戦果を發表した。

神風特別攻撃機隊の若武者、必死必中の戦果は

- 艦空母艦 三隻
- 駆逐艦 一隻

特車五公表昭和十九年十月二十八日十五時神風特別攻撃機隊隊員に關し聯合艦隊司令長官は左の通令軍に布告せり

本 告

戦國○○○飛行隊分隊長 海軍大尉 行男

戦國○○○飛行隊附 海軍一等飛行兵曹 中野 登雄

戦國○○○飛行隊附 同 谷 樹夫

戦國○○○飛行隊附 海軍飛行兵長 水 峰 肇

戦國○○○飛行隊附 海軍上等飛行兵 大 原 繁明

神風特別攻撃機隊隊員として昭和十九年十月二十五日○○○度○○○度○○○度の間に於て中隊航空母艦四隻を基幹とする敵艦隊の一群を捕獲するや、必死必中の體當り攻撃を以て航空母艦二隻撃沈、回一撃空上機隊、駆逐艦二隻撃沈の戦果を収め悠々の大義に殉ず。忠烈萬世に傳はり、仍つて我ら其の殊勳を認め空軍に布告す

昭和十九年十月二十八日
聯合艦隊司令長官 豊田 副 武

艦空母艦 一隻
駆逐艦 六隻、陸艦 二隻
駆逐艦 二隻、艦空母艦 一隻
艦空母艦 三隻

合せて十九隻であつた

皇國に仇なす敵艦隊が太平洋に於て、機をもちてやまざる神風特別攻撃機隊よ、花ならぬを、大君の御機と惜しみなく散らす若武者よ

戦一艦隊

我らは、その姿に「日本人のまごころ」を見る。神代なからの「本然の日本人」を知る。「生も死も神のまにまに大君の御機となりて仕へまつらむ」

果の日本人の御機を、日のあかりにするのである

あよそ日本人ならば、一塵、皇國の大事に關しては、かへりみすることなく大君の機にこそ死なむ志を持たぬものとしてあるまい。まこと、木蘭く草むす屍、さては遺棄せずとも、些かの機としてないのみか、なほ未だ、忠誠心の足らざるなきやを憂ふるのである

神風特別攻撃機隊の若武者は、平素の訓練にあつて必死を自覚してゐた。そのまよところば、我が身を必中の機隊、魚雷として一機よく一艦を撃り去り、皇國千年の運業を記ぐにあつた

長くも

上御一人 萬世に直らせ給うて、我ら臣下である。扶桑に死してこそ日本人なのである。そのためには、生死の如きは語外、断念するところは唯一つなのである

この心事にあつては、今日まで幾度かの國難に身を投じた數々の「決死隊諸勇士」のそれ

と遺絶不斷、血の闘争を有する。いはん神風特別攻撃機隊は、近頃は日清戦争に急奮を振いて風雲激海内に突入した水雷艦隊、日露戦争の雄胆隊、さては今大東亞戦争に於ける特別攻撃隊の諸勇士によつて相傳へ、相受け來つた帝國海軍の傳統、神武御尊征以來の大軍の精神が、神然、運り傳つた精華なのである

神風特別攻撃機隊員の若武者の心事を讀むて、我らの胸に強く迫るものは、その自らの機隊を確證できない結果即ち死といふ事である。吾々の「決死隊」諸勇士には、自らの機隊を確證できる機会なしとしなかつた

だが、神風特別攻撃機隊員の若武者にはその機隊は絶対にない

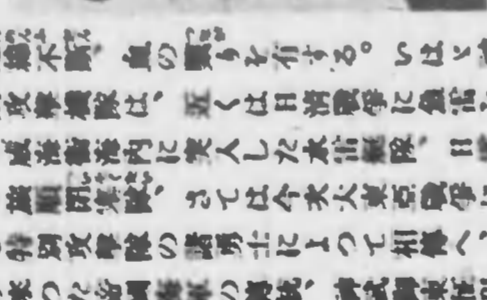
しかも若武者は威然と征いてやまぬ

思うてこゝに至れば、我らは、たゞ、機を正して、断然 断絶するのみ

想うてもみよ、進發の命令は「死」を宣することである。進發することは既に

東島隊出發！ 出發軍前に、機隊をつきつゝ、隊員の手を一人つとつつかと握つて歸す司令！ 抱くは斷衷

比島○○○基地十月二十五日 小野田機隊員謹言



に「死」である。命ずるものも、心中無言の裡に、時とところこそは異なるれ、共に死するを誓ひ、命ぜらるものも、耳には聞かされ、その魂の誓ひを知るのでなければ、到底、冷静不然たり得よう道理はない

更に、神風特別攻撃機隊員若武者の遺書を見ざる地上勤務員は、その天啓けり去る機を地に伏して拜み、司令は外装に身を托して見送り、副長はこげつ、まろびつ、驚かざる涙間に涙しゆく美姿を涙しなく追ひかけたといふ

この心事、胸の裡は、「自分達も必ず續くぞ」の無言の誓ひでなくてはならない。若武者を生ける神々と想ふ心もさうながら

このやうな神風特別攻撃機隊員の若武者を中心とする機隊は、唯一つ、「大義、軍人」の精神の上で打ち立てられる。それは、死するも皇國を護り抜く、國運維持のためには敢へて悠々の大事に生くる日本人のまごころに想ふものである

いひかへれば、神風特別攻撃機隊は「日本人のまごころ」に咲いた花である。その類なき花を美しく咲かせ、仙花と散らすまい、その心遣りが神風特別攻撃機隊をめぐる機隊なのである

「日本人のまごころ」——皇國あるを知つて我あるを知らず、皇國の大事には我が一切を捧げ盡す忠誠心、これは神代なからの日本人の本心であり、この心を當時もつことが、日本人本来の姿である

「日本人のまごころ」は皇國の歴史と共に傳へられ傳はるもので、現に我らの五體に脈々と流れてやまぬ血脈の中に存在してゐる。日本の美しい山河とも結晶してゐる。藤田東湖は、これを「天地正大氣」といひ、軍神廣瀬中佐は「誠字」と題つた

いさ、皇國國難の大事に「日本人のまごころ」の花、神代からのかぐはしい花は、咲き咲いて絶えようとしな

我らはこの類なくかぐはしい花を、美しくしと信仰するのみであつてはならない。我らもまた我らの「日本人のまごころ」を、その

本然の姿で現はすことに努力せねばならぬ。そしてこの「類なき花」を立派に實に結ばせるのだ

「日本人のまごころ」で断絶を断絶しよう

そして神風特別攻撃機隊に續くのだ

一機、見送りを願へて續くのだ

大本營海軍報道部

長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中

長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中

長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中

長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中

長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中

長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中

長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中

長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中

長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中

長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中

長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中

長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中

長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中

長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中

長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中

長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中

長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中

長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中

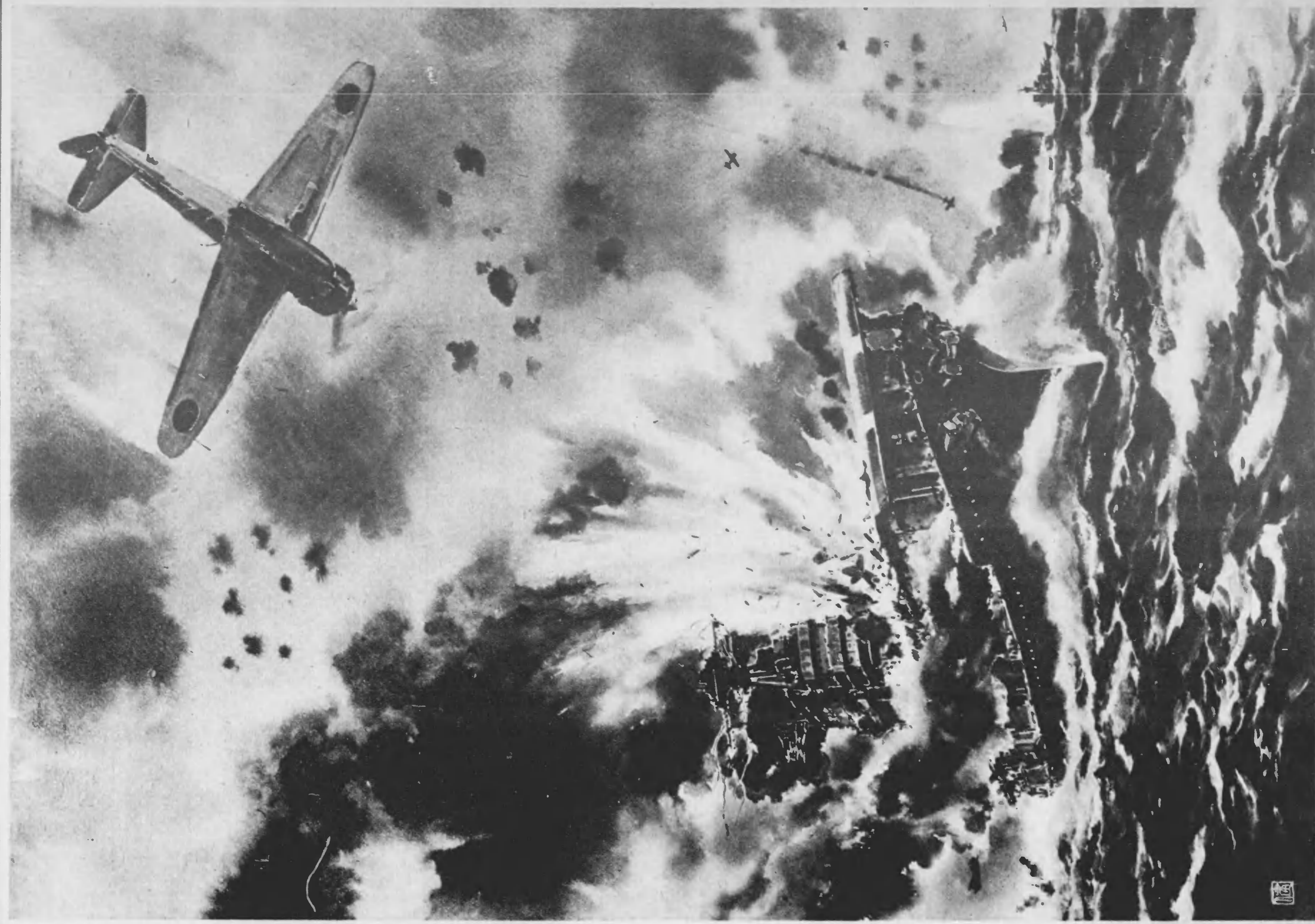
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中

長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中

長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中
長兵行飛等一軍海野中

日	機隊	機隊	機隊
25日	スルアン島東方	艦空母艦	艦空母艦
26日	スラバヤ島東方	艦空母艦	艦空母艦
27日	レイテ島	艦空母艦	艦空母艦
28日	上ラソン島東方	艦空母艦	艦空母艦
29日	スルアン島東方	艦空母艦	艦空母艦
30日	スルアン島東方	艦空母艦	艦空母艦
果戦合算		艦空母艦 三隻	艦空母艦 一隻





神風特別攻撃隊想像図

敵軍に命を惜しまず
必死の覚悟をもち、
敵艦隊を襲撃し、
沈没させる

重光 謙次



る唇を艦敵之嘴鶴はらゆ

十月一日より二十三日まで 決戦必勝増産運動

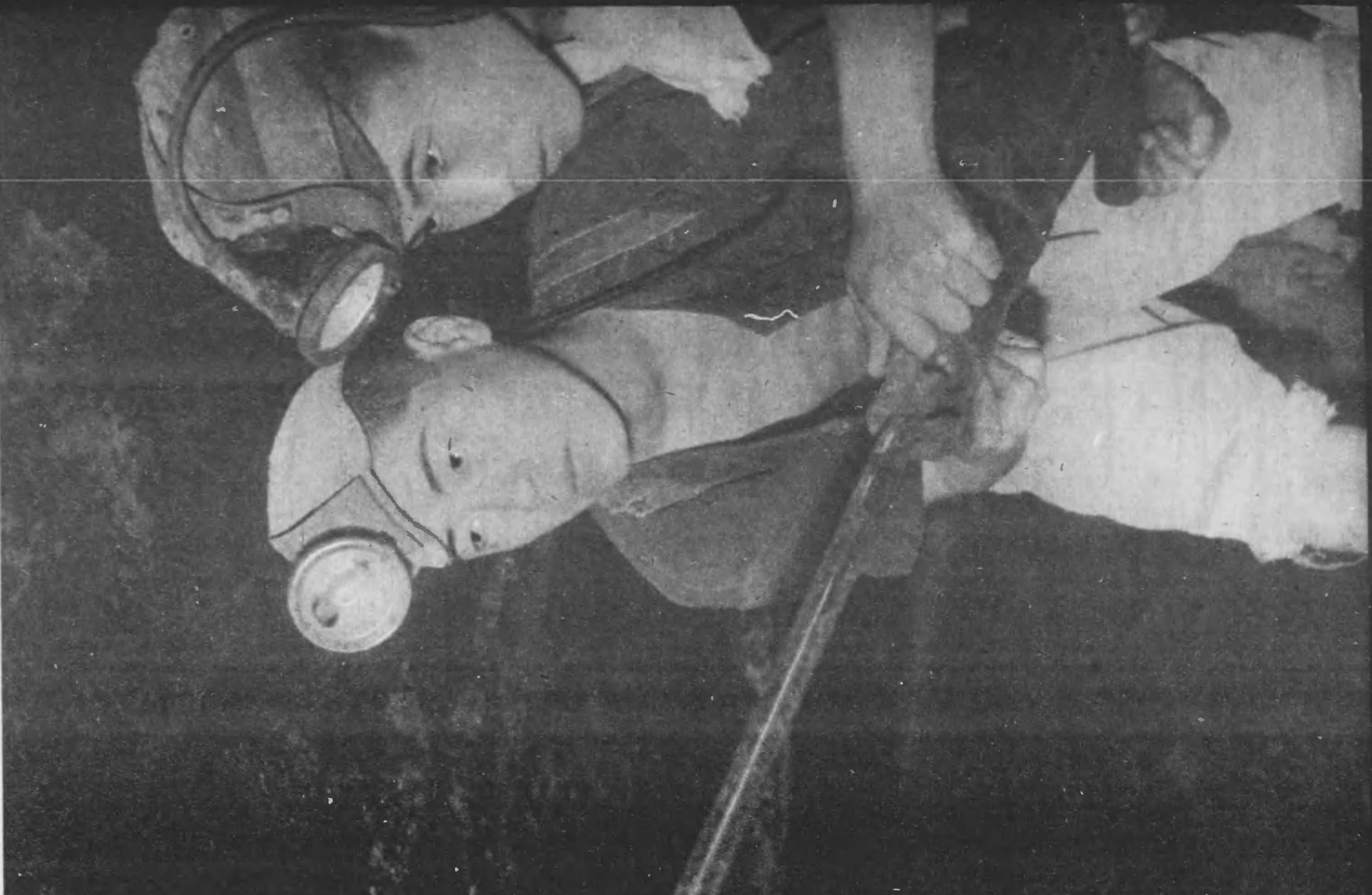
石炭がなければ戦争はできない。海軍の艦隊も、空軍の飛行機も、陸軍の戦車も、船舶も、燃料を必要とする。燃料がなければ戦争はできない。さらに食糧増産に必要となる肥料も、アスピリンなどの薬品も、軍需のガスも石炭が生みの親であつて、正に石炭こそは現代戦の父であり、國民生活の母である。

この石炭増産が早くから五大重要増産の一つに指定された所以がある。しかし、決戦下の今日では、海上輸送力は作戦地域への兵隊、兵器、補給物資などの輸送に充てられるから、これまでのやうに滿洲、北支から採掘される石炭は減少するものと思はねばならない。しかも需要は飛躍的に増えてゐる。もちろん石炭などの代用燃料を使ふとか、調整によつて石炭を節約するとか、その対策はさまざまあるが、内地産石炭の大増産が一軍手近か、最も有力である。

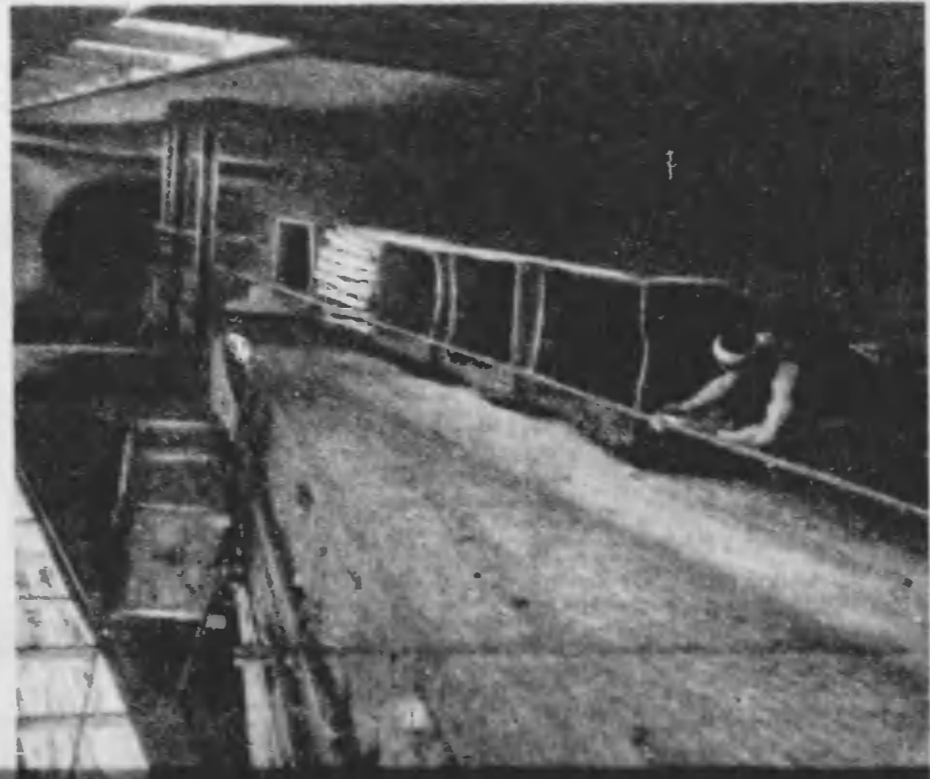
このために去る十月二日から決戦必勝増産運動が全國の炭礦にくりひろげられてゐるが、中でも内地産石炭の大増産を期すために九州の炭礦の真珠は物づく、この福岡県三井田川嶺山では、全山こぞつて増産へ夜も寝ない。動員したばかりの勇士たちが、血闘、突撃隊を組織し、臨時隊所に出動して敵へ上げた熱戦の跡を捜せば、北海道の炭礦から歸還して来た突撃隊士がこれに相呼應して増産の陣頭に立つ。さらに決戦増産に應じて、工場からこのに配置された増産労働者も、勤務場所を受けな練成もそのまゝに自信たっぷり働けば、朝鮮の労働者はわれもみなりの自覚によるひ立ち、このほか勤勞動員の田川東莞女は選抜、檢査に、田川工業生は坑木運びに、或は天理社の年をいた信直など、汗ばみみれ、土まみれで敢闘してをり、これこそ國を救つての増産の心強い精神である。

岩崎沖、フィリピン沖航空隊の大隊長に全山は道産増産に移り、その日、増産指定量を越かに突進する戦果をあげたといふ。われらは「増産で敵艦を喰ふ」と力闘をつづける突撃隊士には、神風特別攻撃隊に懸ける生産者の「まことろ」がともつてゐる。

炭礦を貫くぞと敵艦を打ち砕く突撃隊士は増産に奮起した。炭礦の腕の進捗を感はずかぬが、坑内へ繰り出す戦士の顔に現つてゐる。



突撃隊士の血と汗のにおひが、増産の陣頭に立って、一軍また一軍と後押しされて来る。



増産の陣頭に立って、一軍また一軍と後押しされて来る。突撃隊士の血と汗のにおひが、増産の陣頭に立って、一軍また一軍と後押しされて来る。突撃隊士の血と汗のにおひが、増産の陣頭に立って、一軍また一軍と後押しされて来る。



「わしらが、じつとしてられまへん」六十七の老いの身で天理教長神牧
辰州開教に加はつた山田清吉さんは、重いつた心にも元気一杯



〇 採炭のすんぞろをトロへ積込む女子学徒の手捌きは板についで、素早く
幹がた

〇 工場から突撃に配属された感涙に、工員職士は路裏の山をみるく崩して
ゆく

〇 機送が計画通りにゆかば、あらゆる機運がびたつと止まる。その大切な
貨物列車を止らすのが、このピラミッド機だ





大東亞 周年 宣言

東京 皇宮公台比日 京東
日六月一十

出席の小磯内閣総理大臣、興亞総本部長、外務大臣、東光大東亞大臣、杉山陸軍大臣、島田陸軍大臣、小笠原政務次官(左から)

東光大東亞大臣の発声

ベルガス・フライビン大使の発声

出席のボリス自由インド假政府首班在座と
總理を興大東一王滿洲國大使、スチーマード
イフ大使、露中親善大使、テノ、モンビルマ
大使、ウイチットタイ國大使、ベルガス・フ
ライビン大使、フランテビニ、イタリア代理大
使(左から)



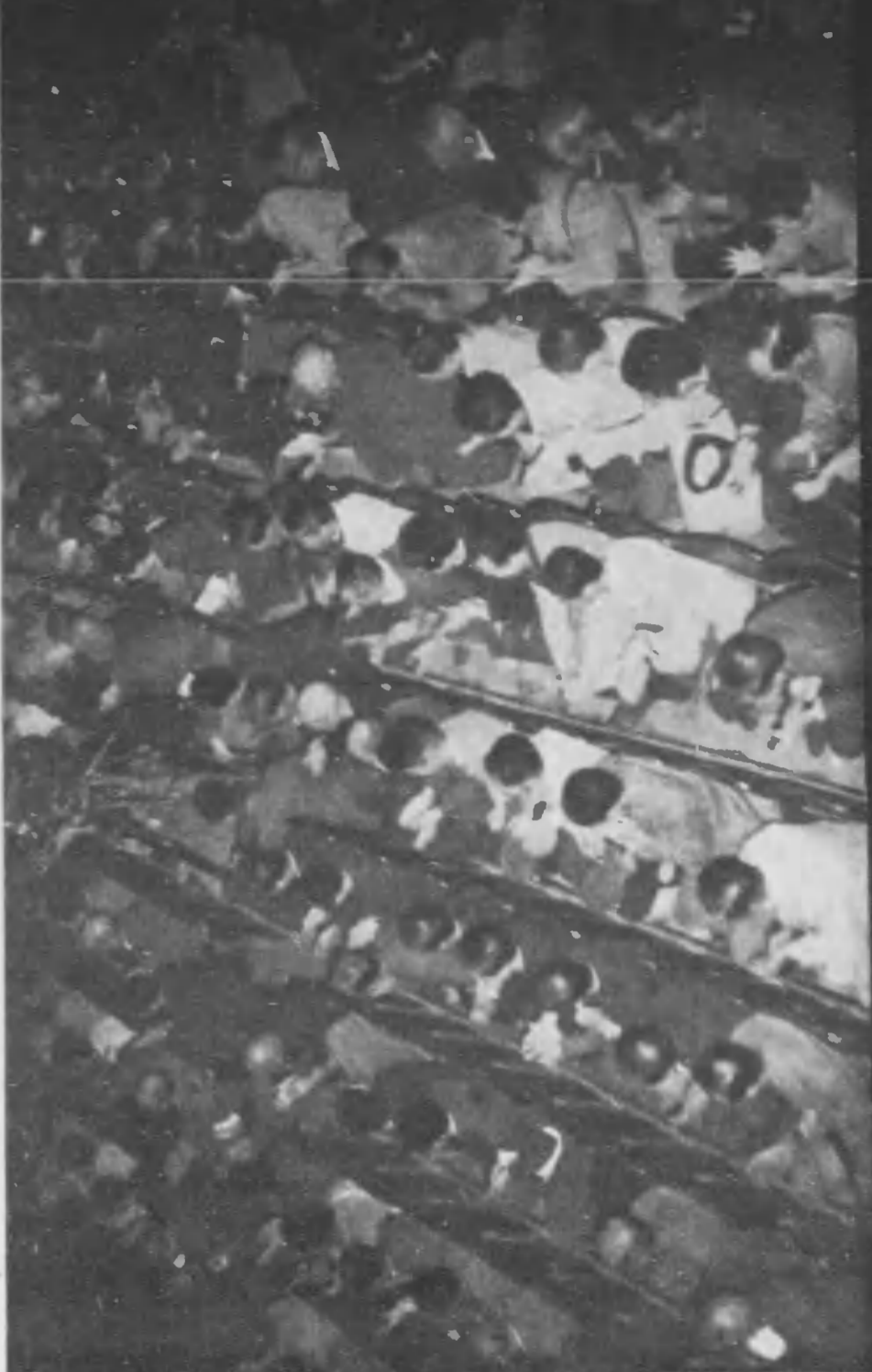
昨年十一月六日、東京で開かれた大東亞
會議の席上、大東亞各國の代表が、大東亞の
歴史に劃期的な大東亞宣言を採擇してから
一年餘、この間、帝國を始め大東亞各民族は
大東亞宣言の真摯を目指して、着實な建設を
進めてきた。本年九月七日第八十五帝國議會
では、新たに東印度民族の獨立が約束され
た。次いで同月二十三日フィリピンが米英聯
軍の戦列に参加してゐる

しかも、フィリピンの参戦によつても分る
やうに、聖戦の形式、大東亞建設の進捗に無
情を感ずる敵は、今やその勢力をあげて反攻
並びに大東亞再建の野望に出で、敵は文
字通り決戦、大東亞各民族の全力を結集して
敵の非望を撃つべき、また撃たねばならぬ決
意をきた

帝國政府は十一月六日、大東亞宣言一週
年の日に政府聲明を中外に發し重ねて
大東亞宣言の趣旨と精神を明かにする
と共に、最近の戦果をますます擴大し
て最後の勝利を獲得する強固な決意を
有することを披瀝した。各國首班もまた
それらの機關を通じて、あくまで帝
國に協力し敵米英を撃滅して大東亞宣
言の大理想實現に邁進すべし旨を明か
にした

なほこの日帝國の日比谷公會堂では、奉
中のボリス自由インド假政府首班及び諸盟各
國大使を迎へて午後一時から興亞總本部主
催の大東亞共同宣言一周年記念國民大會が
開かれた。一年前新しい大東亞史の基礎が
固められた聖なる日を記念する國民大會は、
折柄發令されてゐた警報が解除された直後
にも拘はらず堂々開幕され、敵軍滅亡の憤激新ら
たに大東亞民族の先頭に立つて興亞大東亞宣
言の實現を誓ふ國民の決意を残りなく示した

興亞總本部近衛總務局長の大東亞共同宣言の
朗讀(右は片岡健策大將)



弾輪



『今場所は敵機隊の飛来でとつとり
 ます。こらんの通り勝ちはないでござ
 ず。まアアア』

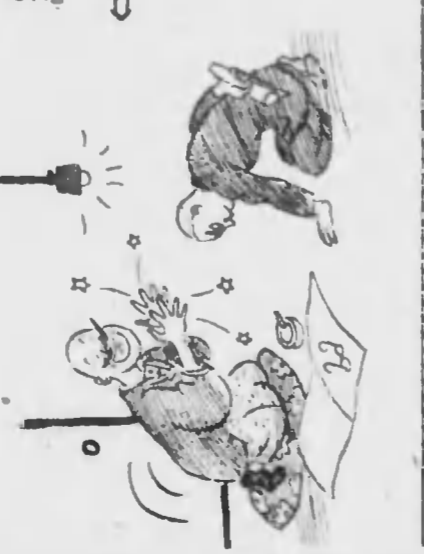
一本ノアノ士儀入 安本 亮
 つい工場の勤勞奉仕のくせが出力士
 の士儀入



こどもも勤勞者 小泉 貞雄
 やアアア、小動力士の勤勞者だ、
 安本 亮 氏 畫



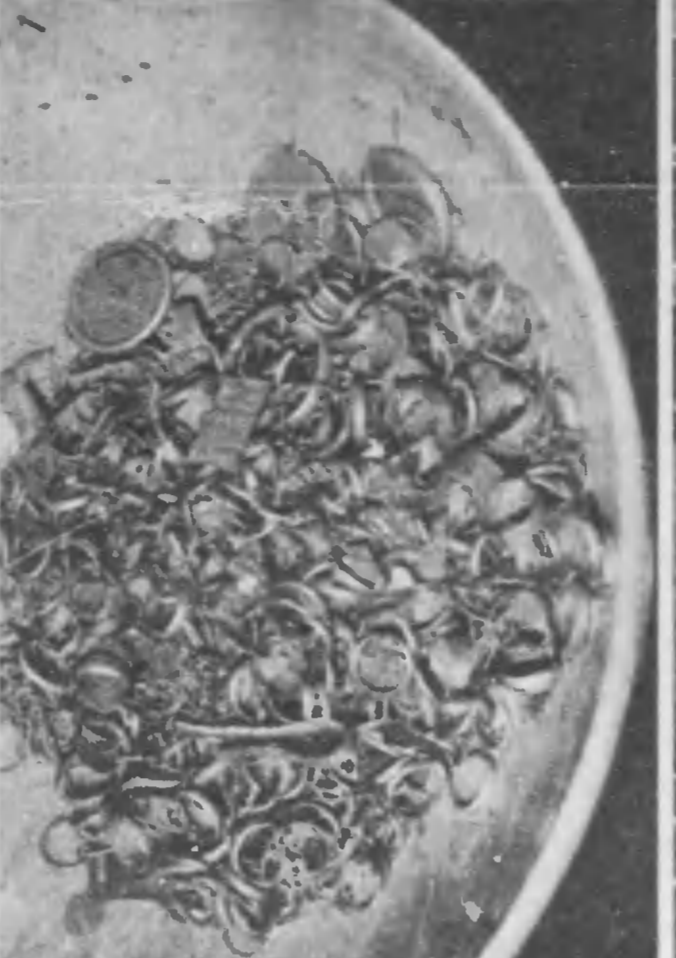
待つてました 川内 正男
 『お父さん、お願ひが、
 誠意志願ぢやなら、さら來なく
 ちやならん。すぐ出せ、今すぐ
 だよ』



走りに使ひ

せん子の姿を見るなり、使ひの男は
 『秋吉おいさんが、あんたに命ひたいつて言ひま
 すよ。すぐ来ておくんさい』
 と言つて、引きかへして行つた
 秋吉おいさんは、この二、三日、病状が思はし
 くない。老齢といふほどもないけれど、この秋冷
 えに腰こんでからは、がつかりと腰へが目立つや
 りになつた。息子は機用中で、二人の膝のめんだ
 りをみながら、畑仕事をしてゐたのだつた
 息子の嫁は、秋吉おいさんと折合ひがわるく
 て、かつと前に買取へもどつてゐる。さらして良
 人の留守の家を築しながら、たくれなど嫁主ち
 さんの家のまはりへ出かけてみたりするので、ち
 いさんから怒られるといふ噂だつた
 『あんな奴はありませんや。それや働きもんに
 ちがひないがね。いまくしいつたらない』
 ちいさんは、いつも、せん子にかり言つて、嫁
 のことをいまくしがる。一時の短氣にまかせて

秋吉おいさんに買取でこじれてしまひ、どうにもなら
 なくなつたらしい。世間にある不和とは、そんな
 些細なことからはじまるらしいと、せん子は秋吉お
 いさんの結構を讀みとるのである
 せん子が駆けつけると、秋吉おいさんは床の上
 に起きなげつてゐた
 『へえ、おかけさまで、もう大丈夫ですが。お膝
 痛さまを呼んでもらつたりして、これで元氣にな
 らなければ、うそだ。お膝を申したくつてはあ』
 しきりに、せん子へ腰をのべるけれど、せん子
 にはわからない。ちいさんのために、けふにも腰
 痛を呼びたいと思つてゐたけれど、誰か先きをこ
 して願ひだらしい。その人は、せん子よりも深く
 秋吉おいさんを愛つてゐるのだと、しめされ
 たやうな思ひだつた
 『ぢやあ、あいつのしたことだ』
 秋吉おいさんは、強ひりに言つた。かくさら
 とするけれど、明るく眼をちらと見せた。せ
 ん子は、そそくさと立ちあがり、ちいさんの腰を
 抱へに走つて行つた



その後の白金

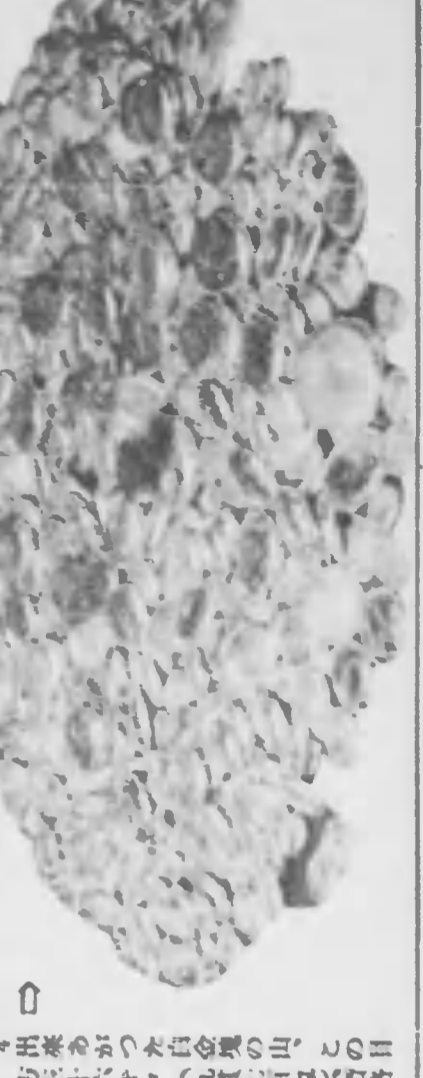
決戦へ、白金の根こそぎ動員が實施せられ
 て以來、國民の熱意あふれる供出は相次ぎ、
 早くも十月末までに目標の六割に達し、翌中、
 岡山の如きは豫定数量の二倍を突破し、以下、
 栃木、愛知、京都、奈良、千葉、佐賀、高知、
 熊本の諸府縣もそれ／＼目標を超えて、軍需大
 臣から感謝状が送られることになつたのは、ま
 ことに喜ばしく、また心強いことでもあります
 さて、供出された白金が、どういふふうに出
 理されて敵機の兵器となつてゆくかといふこと
 については、供出の有無を問はず、國民の誰も
 が知りたいことではないかと思ひますので、こ
 こに回収白金製品が純白金塊となるまでの工程
 を簡単に説明いたします
 國民の供出した白金製品は、純白金のほか金、
 銀、銅、ニッケルその他の不純物を含んでゐますの
 で、まず最初に溶解して、可溶性の白金酸類
 (銅、銀その他の酸)を溶解した後、水素を還元して
 白金酸類に析出させて、水素を還元して、白金酸類
 を加へて金を分離させます。かくして得られ
 た酸性溶液から、なほ不純物として含まれてゐる
 銅、銀、ニッケルその他の酸を沈澱させ、これを濾過し
 て純白金酸を得ます。次にこれに硫化アンモンを
 加へて、硫化白金酸アンモンといふ黄色の化合物を
 得、これを乾燥して白金スポンジとし、さら
 にこれを高真空炉の中で焼して純白金塊と
 するのであります
 かりして出来上つた白金はいよいよ決戦兵器
 として加工せられ前線に出勤するのであります



1 精煉処理によつて銅、銀その他の酸の
 可溶性白金酸を溶解したものの



2 純白金塊に硫化アンモンを加へ、
 黄色の白金酸アンモンが沈澱した
 ところ
 3 白金スポンジを高真空炉の中
 で焼かして純白金塊としてゐると
 ころ、この爐の中の温度は千八百
 度あります



4 出来あがつた白金塊の山、この日
 方三十六キロ (九百七十匁) 程度
 に見積つてつと六十両強です

國民合唱 學徒勤勞の歌

あ、やみがたが(君)の
 情は、燃えて燃へて
 秋風の響かり
 あ、うけつたし(君)の
 熱情を、燃へて燃へて
 いさ、秋風をいどみなん
 吹せわれ、吹せわれら
 君、國と共に生きん

あ、秋風もこの(君)の
 つらなく(君)の
 秋風を、燃へて燃へて
 あ、たふら、もなほ(君)の
 せしに(君)の
 いさ、秋風をいどみなん
 吹せわれ、吹せわれら
 君、國と共に生きん